

祈りのきずな

7月

詩編55編～詩編85編

野方教会（福岡） 牧師 広木 愛（ひろき あい）

1 日（火）詩編55編23節

礼拝者ダビデの姿は、主の前で、悩みの中にあることが告白されている。主の守りがあれば…と祈るダビデ。どれだけ偉大な信仰者であっても、不安に襲われ、動揺することがある。しかし、それは不信仰なのではなく、この世で生きていく上で当たりまえのこと。その中で主により頼む姿勢をダビデから学びたい。

愛知新生教会と^{しづな}湊谷和美牧師（愛知・西春日井郡豊山町）

2 日（水）詩編56編14節

神のための戦いとは「聖戦」と言葉を整えても、人同士が殺し合うもの。信仰者ダビデも、いつも主の勝利があったわけではなかった。けれども、ダビデはその敗北の中でも主に祈り、礼拝を続けた。勝つことが祝福ではなく、絶望と思える中でも、より頼める神と共に歩む恵みにあずかっていることを大切に過ごしたい。

南名古屋教会と山川明美・山川高平各牧師（愛知・名古屋市南区）

3 日（木）詩編57編 2 節

真の礼拝はどこでささげるのがただしいのか。教会の礼拝堂だけ？ 家での家庭礼拝？ また職場の休憩室？ 祈りたい時？ ダビデは逃亡中に洞窟の中で礼拝している。一人での礼拝も信仰共同体の友との礼拝も、私たちに^{なら}は大切なもの。ダビデのように、どんな時でも、礼拝するその姿に倣いたい。

瑞穂教会と秋山義也牧師（愛知・名古屋市瑞穂区）

4 日(金)詩編58編11節

ダビデの賛美の言葉は、すべてが神賛美のようなきれいなものだけではない。ダビデを理解してくれる人がいない、敵しかいない、そんな状況の中にあつたのか、呪いのような言葉が賛美の言葉としてささげられる。私たちの賛美の言葉はダビデのように自由なもの。心にある言葉を紡いで主にささげたい。

平針教会と谷^{ひらばり}総^{たにかせ}安雄牧師(愛知・名古屋^{てんぱく}市天白区)

5 日(土)詩編59編17節

ダビデはどんな窮^{きゆう}地^ちに置かれても、神に頼る姿がある。主の前にただしく生きようとしても、それぞれが神さまからいただいた、ただしさがぶつかってしまう。そのぶつかりの中で、どんな賛美をささげていくのか、どんな祈りをささげていくのか、詩編を通して示される。賛美の豊かさを私たちもいただきたい。

東山教会と鈴木直哉牧師(愛知・名古屋^{ちくさ}市千種区)

6 日(日)詩編60編12～14節

争いの中で、神が力を与えてくれれば「敵を踏みにじって」くれるというこの表現。力があれば、相手を支配することができるということを私たちに教えようとしているのだろうか。祈りが聞かれなかった時に、この歌から苦しみの中でも主の救いを祈り求める大切さを受け取りたい。

名古屋教会と白石^{しら いし}久幸牧師(愛知・名古屋^{ちくさ}市千種区)

7 日(月)詩編61編 3 節

神の恵みを確信しながらも、それでも日々の歩みには私たちの思いもしないことがたくさん起こる。主が私たちの避けどころ、「力強い塔」と確信しながらも、主の守りを感じない時があるかもしれない。その時でも、変わらない神の慈しみとまことを覚えて、賛美し続けることができる者になりたい。

豊橋教会と小林大記^{ひろ き}牧師(愛知・豊橋市)

8日(火)詩編62編 8～9節

神から来る言葉を日々待ち望む。そのために日々み言葉をいただきながら一日分の生きる糧^{かて}をいただく。神の言葉だけを聞くことができたならどれだけ幸せなことだろうか。私たちの周りにはさまざまな言葉^{ことば}が飛び交う。けれども神の言葉以外は空しく、力に依存し、搾取^{さくしゅ}に続く言葉に心を奪われないよう、主の声に聴き従えるよう祈りたい。
岐阜教会（岐阜・岐阜市）

9日(水)詩編63編 2節

神賛美に招かれながらも私たちは渇く。ヤコブの井戸のそばでイエスさまと出会った女性は渇くことのない、永遠の命に至る水をいただいた。キリストにつながる出会いを通して、わたしたちの渇きが満たされていく。主の言葉にとどまり生きる恵みに今日も招かれていることに感謝。

^{かがみがはら}
各務原教会と後藤寿^{ひつし}牧師（岐阜・各務原市）

10日(木)詩編64編11節

ダビデの賛美を見ると、周りには味方がおらず、苦しい中で礼拝をしている姿が想像できる。神のただしさに忠実に生きていても、理不尽にも感じる問題と直面するのだろう。そのような時にでも、神の時に主の守りがあるように、主への叫びを、必ず神が聞き入れてくださっている信頼にとどまり、歩む者とされたい。

豊田伝道所 ※3月31日付で閉所いたしました。

11日(金)詩編65編 6～14節

ダビデの賛美。神の計画している未来に大いなる期待をもって待ち望むダビデの信仰。未来を私たちは見るができない。神の計画に期待するしかない。信仰とは見えないものに心を留めること（Ⅱコリント4・18）。私たちもダビデのように目の前の困難から目をそらさず、それでも賛美^{たすけ}を携えて歩みたい。

福井教会と平良憲誠牧師（福井・福井市）

12日(土)詩編66編 1 節

礼拝に招かれている人は誰なのか。救いにあずかることのできる人の範囲は？ 隣人とは？ この詩編からは人だけでなくすべての被造物が主の栄光を現している。私たちは神が造られたすべてのものを大切にできているのだろうか。人に「支配させよう」(創1章)は、すべての命、被造物への共生に私たちを招いてくださっている。

富山小泉町教会とミンピョングン関内俊牧師(富山・富山市)

13日(日)詩編67編 4～6 節

私たちが喜びの賛美をささげることができるのは、どのような時だろう。安心して賛美できたり、安心して日々の生活ができ、命が大切にされていることを実感できる時ではないだろうか。すべての民がそのように感じる事ができるそんな日が来るのだろうか。主の平和にすべての民が招かれている。

金沢教会と本井智美代務者(石川・金沢市)

14日(月)詩編68編 8～11節

イスラエルの民がエジプトから約束の地へと導きだされた。奴隷だった民が、もう一度「人」として生きなおすために、神は寄り添い続けた。命の尊厳を取り戻すために40年という長い年月が必要だった。長い年月をかけて取り戻したものを私たちは簡単に手放してしまう。戦後80年目。戦前とならないために祈りたい。

浜松教会と伊藤勝彦牧師(静岡・浜松市)

15日(火)詩編69編14～16節

私たちが担う平和を作る働きは、この世界にどれだけのインパクトを与えられるのかわからない。けれども、その小さな一歩でも、あきらめることなくもがきながらも、小さな祈りを続けたい。深い沼にはまっていたとしても、主がその沼から引き上げてくださるように、私たちの祈りが世界中に響き合う日が与えられる。

川根教会と松下正巳牧師(はいばら かわ ね ほんちよう静岡・榛原郡川根本町)

16日(水)詩編70編 3～5節

命の危険が目の前にある中で主の救いを祈り求める賛美。どれだけの命の危険にさらされていたのか。身を屈めて生き延びるために懸命に祈っていたのだろう。神が私たちの助けであり、逃れの場というのは、圧倒的力を持ったうえでの助けではなく、力によって支配されている人たちにとっての助け主であることを覚えたい。
清水栄光教会と大竹敏生牧師（静岡・静岡市清水区）

17日(木)詩編71編 6～10節

私たちの命は生まれ出る前から、この世での生涯が終わる時まで主の守りの内にある。高齢になって教会の奉仕ができない…という声を聞くこともあるが、礼拝者としての姿、祈り人としての姿を次世代に見せる奉仕はいかに大きな働きだろうか。命の最初から最後まで主の栄光を現す生き方に招かれて。
静岡教会と松坂克世牧師（静岡・静岡市葵区）

18日(金)詩編72編 12～14節

「ソロモンの詩編」と名づけられた詩編の最後は「ダビデの祈り」という言葉で終わる。為政者としてのソロモン王へのとりなしの祈りの言葉が込められている。この祈りは今の私たちの時代にもつながる。この詩編の祈りを教会の中だけの祈りにせず、すべての人と分かち合いたい。「王の目に彼らの血が貴いものとされますように」。アーメン。
三島教会と小川宏嗣牧師（静岡・三島市）

19日(土)詩編73編 13節

主の前にただしく生きようとしても、空しさを感じるのはなぜだろうか。神に逆らう者が安穩に暮らしながら、財をなしていくのであれば、神に従う生き方の魅力はなんなのだろう。神が私たちに聖書をとおして伝えてくださる福音とは何かを問われている。空しさの中にあっても、主の恵みを大切にしていきたい。
富士吉田教会と宮西宏明・宮西千晴各牧師（山梨・富士吉田市）

20日(日)詩編74編 1 節

主が今すぐに救いのみ手を備えてくれない不安はぬぐえない。それでも、祈りと賛美を日々ささげたい。イスラエルの民をエジプトから解放していった神の偉大なみ業に、私たちも期待しつつ、「ホサナ!」と賛美をし続ける信仰を詩編を通して示される。イスラエルと神の契約、そしてイエス・キリストを通していただく恵みに感謝したい。

山梨教会(山梨・山梨市)

21日(月)詩編75編 1 節

詩編の指示記号はイスラエルの民の賛美の豊さを知ることができる。「滅ばさないでください」と聞くと、「あ〜、あの歌か!」と自然と声を合わせて賛美できたのだろうか。聖書も賛美の詩も覚えるというイスラエルの民の教育はストイックにも感じるが、いつでも神のみ言葉と賛美を思い出せるという豊かさがそこにある。

松本福音村教会と^{フアン・ド・ヨシ}黄基英牧師(長野・松本市)

22日(火)詩編76編 2～3 節

神の幕屋はサレムに、そして、神の宮はシオンに…、そこで神さまは戦争の道具で弓矢を、盾と剣を、そしてそれらの武器を使う戦いそのものを砕かれる。幕屋や宮は礼拝が行われる場所。礼拝は戦争に行く人を力づけるのではなく、戦争に必要な道具とその戦争を打ち砕かれる。礼拝が平和を分かち合う。

相模原希望伝道所と^{イ・ジェ・ホ}李在浩牧師(神奈川・相模原市中央区)

23日(水)詩編77編 2～10節

どれだけ祈り求めても、神からの答えがないと、神への信頼が揺らいでしまいそうになる。諦めることなく神に賛美を、苦しさを叫び続けた人たちがいたことを詩編は私たちに伝えてくれる。そして賛美を共にささげる仲間がいること、祈りを分かち合う友がいることは、なんという喜びなのだろうか。

大和愛宣教伝道所と^{イ・ドン・ジュ}李東柱牧師、^{カウ・シヨク}郭淑主事(神奈川・大和市)

24日(木)詩編78編 1～4節

詩編に出てくるマスキール。ヘブライ語の「悟る^{さと}」という言葉につながる賛美。この賛美は、賛美をリードしたり、また礼拝者たちが教えを忘れないようにするもの。「信仰継承」が教会では話題になるが、教会を担う人「材」ではなく、私たちが伝えたいものは、神賛美の大切さ、福音に生きることを共に分かち合う豊かさなのではなかろうか。松本蟻ヶ崎教会と齊藤弘^{ひろし}司牧師（長野・松本市）

25日(金)詩編79編 6～11節

詩編を含め旧約聖書には自分たちを迫害する敵を滅ぼして欲しいと神に願う祈りがある。力による支配は、勝ち負けがわかりやすい。しかし、その裏にはいつ負けるか、という恐怖が残る。力は滅ぼし合う道にしか繋がらない。力ではなく、神の愛によるつながりによって人と出会っていきたい。
大秦野^{おおはだの}教会と日高龍子^{ひがひりうこ}牧師、日高嘉彦^{よしかひこ}協力牧師（神奈川・秦野市）

26日(土)詩編80編20節

神にわたしたちが生きるべき場所へと連れ帰ってほしいと祈る言葉。しかし「あなたはぶどうの木をエジプトから移し／多くの民を追い出して、これを植えられました」（9節）では、誰かの居場所を神が奪い、イスラエルに与えられた、となる。はたして神のためなら誰かから奪ってよいという言葉は福音なのだろうか。
ふじみ教会と犬塚契^{いぬづか}牧師、市川牧人^{いちがわ}牧師（ユース）、犬塚修・草島豊各協力牧師（神奈川・平塚市）

27日(日)詩編81編 7～9節

奴隷状態だったイスラエルの民が神によって命が回復されていく、出エジプト記を彷彿とさせる詩編。神がエジプトで懸命に生きてきたイスラエルの民に憐れみを示されたことが伝わってくる。詩編が今も私たちの元に届けられているので、イスラエルの民と変わらず私たちにも、神の目が向けられていることを知ることができる。
インドネシア伝道と野口日宇満・野口佳奈各宣教師のために

28日(月)詩編82編 2～4節

イスラエルの民は、エジプトで奴隷状態。その後も戦いが続き、バビロニアによって国が滅ぼされ、捕囚になった。共同体が壊されるという危機に直面し、また国を失くしてしまった。けれども、そのような中でも神への信仰が失われることはなかった。神につながるために作られた聖書に日々聴いていきたい。

国際ミッション・ボランティアのために(佐々木和之氏・ルワンダ)

29日(火)詩編83編 2～4節

周りの空気を壊さないように、多くの人たちと違わないように、みんなと「同じ」ように、忖度して生きようとする力が私たちの周りにはまわりついている。その力に吸収されないように、離れることができるように、聖書を通して神が示してくれる命を日々生きることができるよう祈り求めたい。

シンガポール国際日本語教会(IJCS)のために

30日(水)詩編84編 11～12節

どれだけ祈っても神が応えてくださらない時、長く生きるよりも早く神の家の近くに生きたいと思う。この詩編が生み出された時、それほど生き抜くことに大きな苦しみを感じていたのだろう。私たちの生きている時代も、戦争も差別もなくなることはない。それでもあきらめることなく主の正義を待ち望む。

アジアバプテスト女性連合(ABWU)のために

31日(木)詩編85編 9～14節

戦後80年目の夏を前に、私たちの世界にはいまだ戦争がなくなることがない。戦後、ではなく戦前・戦中の時代を生きている。それでも、主の平和がすでに来ている、という宣言に信頼して生きるほかない。主の福音に生きる者は、平和を実現する者としての生き方へと招かれている。

プリ・キンダーガルテンスクール(インド)のために